

平成 2 3 年度帰国報告会並びに帰国教員歓迎会

平成 2 3 年 6 月 2 5 日 (土) に上記の会が、ピュアリティまきびで開かれました。当日は森崎顧問、今井岡山県教育庁教職員課長、山本岡山市教育委員会学事課長はじめ約 4 0 名の会員が出席しました。総会の後 6 人の帰国教員から貴重な現地での体験が報告されて有意義な会となりました。



続いて開かれた歓迎会で都築勉会長は、中国大会が軌道に乗ってきており、組織の力を高めていきたい。今年度より、岡山県内を 3 つの支部に分けて活動することになった。私たちは、現地で暮らし現地の空気に触れ、現地の人と交流してきた強みを生かしてネットワークでつながりながら国際理解に力を注いでいこうと挨拶しました。



続いて、菅野和良副会長は、今年度初めて、総会の後に帰国者報告会および歓迎会を行い、現状を知ってお互いの結びつきを深めたい。平素の仕事と同じく、本会の仕事を大切なものにとらえてほしい。日本では、東日本大震災以来閉塞感があり、内向きになっているが、今回報告してくれる帰国者のようなチャレンジャーを見習っていききたいと話しました。



今井岡山県教育庁教職員課長、山本岡山市教育委員会学事課長からは、3 年間の貴重な体験を、ぜひ岡山県の教育の充実に生かしてほしい。そして世界に羽ばたく人材の育成に力添えをお願いしたいというお話をいただきました。また、派遣希望者が減少しているので、推薦者を増やして欲しいとのことでした。



森崎顧問からは、教育委員会に 4 0 才のころから 2 1 年間派遣教員の書類のお手伝いをしてきた。大阪に面接官として文部省から呼ばれ、岡山県の派遣者は優秀だと感じた。私も行きたかったが、退職後今日帰国報告されたバルセロナやバンコクやペナンに旅行し、その時のことを思い浮かべながら聞いた。子どもたちは、知識のみの話よりも、教師自らの体験による話を、より感銘深く聞くことだろう。海外派遣という素晴らしい研修の機会を、これからの教育にぜひ生かしてほしいと話されました。





乾杯のあいさつは、赤坂英二参与でした。現在は就実大学教育学部教授として勤務されています。「信頼される教師への52か条」という本を出版され、若手教員や教職課程で学ぶ学生らに思いを伝えられています。

続いて、帰国者からの報告です。



浅野智宏先生は、教頭としてデトロイト補習校に派遣されました。緯度が北海道と同じくらいで、冬は -20°C にもなり、雪がよく積もったそうです。その分、春夏が開放的だったそうです。学校は、リーマンショックで200人ほど児童生徒数が減少し、約800人だったそうです。現地校は、フランス・イタリア・ロシア・インド・中国・韓国など多国籍で寛容的だったそうです。子どもたちにとって学校は楽しいところという考えがあり、飾り付けがとても派手だったそうです。また、パジャマデイといって先生も子どもたちも学校にパジャマで来る日があったり、ハロウィンやストレンジヘアデーなど、楽しいイベントがたくさんあったそうです。教頭として、授業のアドバイスや職場環境の改善、研究授業などのデータベース化をがんばったということでした。



中原寛之先生は、教頭としてコロンバス補習校に派遣されました。やはり、冬は -25°C にもなり、見たこともないようなつららげができたそうです。また、夏には竜巻が襲い、みんな地下室に避難するそうです。児童生徒数は、約500人です。アメリカは、休み時間が自由で、ぬいぐるみやDSなどのゲーム機を持ってきて遊ぶのだそうです。オハイオ州は、山がなく平坦なので、自動車を運転していたら、何時間も真っ直ぐに走ることもあり、つい眠たくなって助手席の奥様から張り手が飛んできたこともあったそうです。教頭の仕事は、教務・研究主任・事務・用務の仕事も兼ね、大変だったけれども人間関係づくりのスキルを学んだので、日本でも生かしていきたいと話されました。



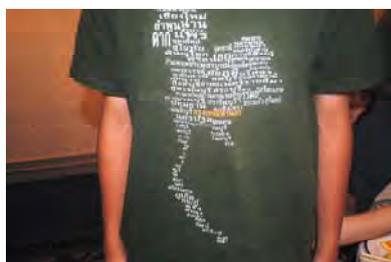
林伸明先生は、ペナン日本人学校に派遣されました。マレーシアは、マレー・中国・インド系住民が暮らす多民族国家です。ペナン島では、中国系が約7割が多いそうです。日本人は、約1500人くらい在住していて、メーカーの工場関係者が多かったそうです。ロングステイの増加も、最近の特徴となっていたそうです。



ペナン日本人学校は、児童生徒数約120人で林先生は、中学部の英語担当でした。日本で「1」の評価の生徒が、「5」になることもあり、意欲と環境が整えば、もっと話せるようになる生徒がたくさんいるのではと感じたそうです。交流学习では、イスラム教のため豚肉を切った包丁はだめなので新品を用意したり、トイレで紙を使わないので水を用意したりしたそうです。



松尾真治先生は、バンコク日本人学校に派遣されました。赴任直後の4月が、一番暑く水かけ祭りがありました。バスに乗っていて待ち伏せに遭い水をかけられたそうです。また、反政府デモが起こり、日本人記者が殺害されて、子どもたちが一時帰国するという事もありました。タイは熱帯の国ですが、夜中にかぶと虫を捕まえに行くと、サソリにさされたこともあったそうです。バンコク日本人学校の児童生徒数は約2500人と、上海と並んで世界最大です。運動会は、観客も含めて7000人にもなる大イベントです。児童生徒の出身地は、首都圏・中京圏・関西圏と太平洋ベルトに集中します。最近では、中小企業や地方出身者の増加・製造業特に自動車関連の増加・保護者の年齢低下などの傾向が見られます。昔ながらの海外駐在員という専門性ではなく、工場の主任クラスが突然赴任を命じられるといったケースが増え、国内産業の空洞化が起こっているのです。教材集めで、ミャンマーの難民キャンプやエイズ患者を受け入れる寺・孤児院・地雷を踏んだ象などを取材し、社会科や総合学習に生かしていきたいと話されました。左のTシャツは、タイの県をタイ語で印刷した物です。



藤原孝裕先生は、ニュージャージー日本人学校に派遣されました。ニューヨークのマンハッタンとは自動車でも40分ほどの距離でしたが、自然が豊かで、大きな家の庭に鹿が来たり、リスが住み着いたりしていたそうです。児童生徒数は約80人で、2~3年で異動していました。大都会に隣接しているため、補習校や塾や私立校などライバルが多い中、研究主任として授業を大切に、友達とかかわりあう授業をめざしたそうです。毎週のようにあるマラソン大会にも参加し、40才以上で3位になりました。(参加者は3人)日本とは違い、競技的でなく楽しみで参加できる大会になっていたということでした。





志水賢治先生は、バルセロナ日本人学校に派遣されました。緯度は東北地方と同じくらいで、人口120万人の大都市です。日本人は3000人くらい住んでいるとのことでした。バルセロナは、ガウディという建築家が有名で、立派でユニークな建物がありました。また、サッカーも有名で、東日本大震災の時には、追悼文を掲示したり、選手のユニフォームにカタカナで名前を書いたりしていたそうです。バルセロナ日本人学校は、次第に児童生徒数が減少し、現在は60人ほどです。貴重な海外での経験を、各クラスに少しずつでも機会をとらえて伝えていきたいと、今後に生かしたいことを話されました。



閉会のあいさつは、平川公之助副会長がしました。このような会を通して、会員相互のつながりが深まり、視野が広がったと思います。岡山県の派遣教員は、海外のどこの国に行っても優秀だと信じています。3年間外国で過ごし多文化に触れた経験を、自分の学級や学校、地域や本研究会で、しっかりと伝えて新しい風を送って下さいと話されました。

